様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　１５日現在

機関番号：３３９２１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2010～2011
課題番号：２２８２００７６
研究課題名（和文）プロレタリア文学運動からエロ・グロ・ナンセンスへの＜転向＞者に関する研究
研究課題名（英文）A study of writers converted from proletarian literature to ero-gro-nansense.
研究代表者
竹内　瑞穂（TAKEUCHI MIZUHO）
愛知淑徳大学・文学部・助教
研究者番号：00581224

研究成果の概要（和文）：本研究では、1920ー30 年代のエロ・グロ・ナンセンスの流行の再検討を行い、(1)そこでみられる反管理の象徴としての「変態」イメージが、谷崎潤一郎などの大正期文学のなかで育まれてきたものだったこと。(2)この流行の仕掛人・梅原北明が、プロレタリア文学から〈転向〉した背景には、資本主義システムを流用することで権力への抵抗をめざす、発想の転換があったこと。がわかった。この刹那的流行が、まだまだ検討すべき文化・思想的な広がりを有していることが明らかとなったといえる。

研究成果の概要（英文）In this study, I reappraised ero-gro-nansense in 1920s and 1930s in Japan. As a result, the following two points became apparent: (1) the image of HENTAI (QUEER) as a resistance to power had been produced by novels of TANIZAKI Junichiro and (2) UMEHARA Hokumei “converted” from PROLETARIAN literature to ero-gro-nansense, discovering a method of resistance to power by diverting the system of capitalism. It seemed that this ephemeral movement had a clue to rethink culture and philosophy in this era.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	750,000	225,000	975,000
２０１１年度	270,000	81,000	351,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,020,000	306,000	1326,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：日本文学
キーワード：文学一般　文化史　プロレタリア文学　エロ・グロ・ナンセンス　モダニズム

１．研究開始当初の背景

1920ー1930 年代の日本社会は、消費文化の隆盛と、社会主義思想または国家主義の台頭が錯綜して進行する、極めて不安定な時期を迎える。そうした世相のなかで、人々の心をとらえていったのが、エロ・グロ・ナンセンスと呼ばれる流行であった。日本の文化史・文学史を考える際、このエロ・グロ・ナンセンスの流行という現象は、モダニズムの畸形的なあだ花として軽視され、詳細に検討され

ることはそれほど多くなかった。
それは、同時代のプロレタリア文学についての研究が、その重要性を認められ、相当の蓄積があるのとは対照的である。例えば、当時の左翼系の文学者の多くが辿った〈転向〉をめぐっては、文学研究や思想史研究をはじめとする様々な立場からのアプローチがみられる。〈転向〉研究の古典、思想の科学研究会編『共同研究　転向（改訂増補）』（平凡社　1978）において中心的に論じられたのは、大文字の〈政治〉の問題へと直結する、著名な思想家たちの思想転換であった。その後の、長谷川啓編『〈転向〉の明暗』（インパクト出版　1999）では、それまでの男性中心の〈転向〉論を反省し、〈女性〉という観点が加えられている。
しかし、同時代の世相を念頭に、もう少し巨視的な立場からみたならば、これらの〈転向〉論には、いまだ大きな死角があると言わざるを得ない。じつは、本研究が注目するエロ・グロ・ナンセンスという流行を仕掛けていった人々の多くが、プロレタリア文学からの〈転向〉者だったのである。先に挙げた〈転向〉論のなかでは、彼らの〈転向〉は「転向のひとつのかたち」「一種の反権力」として言及はされるが、それ以上議論が深められることはなかった。だが、このエロ・グロ・ナンセンスへの〈転向〉者たちが、一時代を象徴するような流行を生み出していったのはまぎれもない事実である。この問題を正面から検討してゆくことは、〈転向〉という問題をさらに多面的に捉え直すことにもつながってゆくだろう。
また、エロ・グロ・ナンセンスの流行を考察する際には、そこに色濃く現れる、倒錯的、あるいは反道徳的なエロティシズム（サディズム／マゾヒズム／フェティシズム／ホモセクシュアル／娼婦など）や、犯罪行為および犯罪者といった〈逸脱的なもの〉への興味といった問題をどのように扱うかという課題がついてまわる。この流行がこれまでアカデミックな研究の対象としては避けられてきたのも、おそらくこうした特性によるところが大きいと推察されるが、それがこの流行の特色を決定している以上、避けて通ることはできないであろう。さらにいえば、エロ・グロ・ナンセンスのこのような側面は、現代の人文科学の世界で非常に重要なテーマとなっている、ジェンダー研究やセクシュアリティ研究、あるいはクィア研究といった〈性〉をめぐる問題系と密接にかかわり合うものである。したがって、この問題を焦点化することは、エロ・グロ・ナンセンスの流行を研究することのアクチュアリティを保障することになるだろう。
以上のような観点から、エロ・グロ・ナンセンスの流行を研究するのならば、その意義は単に風俗史の手薄な部分を補完するといったレベルにとどまらないはずだ。それは、種々のイデオロギーと消費文化が複雑に絡み合うなかで構築されていた 1920ー1930 年代の思想や文化状況を、新たな角度から切り取り直す契機となりえると考えられる。

２．研究の目的
1920ー30 年代のエロ・グロ・ナンセンスの流行を再検討する。本研究では、(1)この流行のなかで濫用された「変態」概念を、通時的・共時的に分析する。それにより、エロ・グロ・ナンセンスの流行の中で、逸脱的なセクシュアリティが大量に流通し、消費されていったことが、どのような意味を持つものであったのかを考察する。(2)その流行の先端にあったエログロ出版物と、それを仕掛けた梅原北明たちを分析し、プロレタリア作家／運動家であった北明たちが、なぜエロ・グロ・ナンセンスの旗手へと〈転向〉したのかを問う。それにより大文字の〈政治〉の問題にとどまらないプロレタリア文学運動の射程を再検討するとともに、この時期の文壇人（知識人）が志向した新たな主体や共同体がいかなるものであったかを明らかにしたい。

３．研究の方法
(1)エロ・グロ・ナンセンスの前段階にあたる大正期の「変態」概念に焦点を当て、この概念がいかに変容していったのかを分析する。具体的には、大正期の「変態」概念を過剰なまでに取り入れた小説である、谷崎潤一郎『鮫人』（1920）と、エロ・グロ・ナンセンス期の「変態」言説を比較し、そこにあらわれる両者の「変態」概念の相違点と共通点を検討する。
(2)エロ・グロ・ナンセンスの仕掛人・梅原北明の思想的な展開を解明するために、彼がエログロ誌の出版活動に乗り出す直前に執筆した小説『殺人会社』(1924) を分析する。プロレタリア文学運動に活動の軸を置いていた時期の北明が書いた小説のなかにあらわれた、思考実験のありようを析出することを通じ、北明の思想的〈転向〉がいかなるものであったかを追う。

４．研究成果
(1) 近代日本における「変態」概念の流行は、エロ・グロ・ナンセンス期に初めて現われたものではない。少し時代をさかのぼってみれば、大正期にはすでに、「変態」を冠する諸テキストが多量に生み出され消費されてゆく、「変態」ブームとでも呼べる状況が出現していたことが確認できる。ただ、その際に注意しなければならないのは、大正期の「変態」概念は、あくまで〈科学的〉な知の

ひとつとして流通したものであったということだ。当時の先端的科学であった変態心理学あるいは変態性欲論に依拠することで、社会に存在する逸脱的とされた人・現象を解釈し、ときにはその治療や改善を図ってゆくこと。少なくともこの時期の「変態」ブームを担った、羽太鋭治らの手による変態性欲論の啓蒙書や、変態心理学の確立と普及を狙った雑誌『変態心理』 が目指していたのは、そういった方向だった。

ところが、エロ・グロ・ナンセンス期の「変態」という言葉の使われ方をみれば、この大正期の枠組みが、ほとんど意味をなしていないことは明らかである。エログロの帝王とも呼ばれる梅原北明が出版した「変態十二史」シリーズ（1926ー1928）をみる限り、全巻に「変態」という語が冠されているが、なぜ「変態」と付けられているのかが明確でないものも少なくない。企画した北明ですら、「変態敵討史」という題名で本を書くことに困惑したあげく、「こぢつければ敵討と云ふ存在は確に変態です。［中略］それに大体今も述べた如く私が、この意味に於ける［＝普通の］敵討ものに手をつけるなんて変態の骨頂なんです」 とぼやかざるを得ないものだったのである。ここに至って「変態」は、以前の科学や医学と結びついた内実を失っている。それはただ、〈普通ではないもの〉を扱っていることを示すタグに過ぎない。

では、大正期の「変態」概念と、昭和のエロ・グロ・ナンセンスのそれとの間に存在する〈跳躍〉は、なぜ生じてしまったのか。この問題を考える手掛かりとなるのが、大正期の「変態」作家の代表格である谷崎潤一郎の小説、なかでも「変態」たちの群像劇とも読むことができる「鮫人」（1920）である。

「鮫人」を、先に挙げた大正期の「変態」概念の枠組みのなかにおいてみると、すでに意味的な転倒が生じていることがみえてくる。大正期の「変態」概念を規定していた変態心理学や変態性欲学は、いわゆる生権力（M・フーコー）的なまなざしで、「変態」たちを管理すべき対象として析出ゆく。この作品の「変態」たちも、多くがそれらの理論を援用するかたちでキャラクターの設定がなされ、ある種の〈病人〉として描かれている。だが、そのような管理の理論によって構築された「変態」たちが、この物語では皮肉にも、種々の規範や管理を撹乱し得る可能性として、ある種のロマンティシズムの対象として活躍させられてゆくのである。

こうした本来の意味を裏切ってしまうような、文学的ともいえる「変態」概念の顛倒した消費のあり方こそが、昭和期のエロ・グロ・ナンセンスにも通底する、逸脱へのロマンティシズムの雛形となったと推察される。

(2)梅原北明『殺人会社』の分析からは、彼の現状に対する強い危機感と、それを乗り越えるための様々な思考実験が小説内で展開されていたことがみえてきた。この時期の北明はプロレタリア文学運動に注力し、左翼思想、特にアナルコ・サンジカリズムにひきつけられていたようにみえる。だが、このテクストを見る限り、彼はそれら思想を無批判に摂取していたわけではない。例えば、左翼思想のうち、マルクス主義に対しては革命後のロシアの悲惨な現状を挙げ、それが机上の空論に過ぎないことが痛罵されている。それではアナルコ・サンジカリズムに完全に依拠しているのかといえば、そこからも根本的な部分においてズレていると言わざるを得ない。日本を代表するサンジカリストである大杉栄の思想と比較するならば、このテクストには社会を革命してゆこうという〈全体〉への志向が欠落している。そこにみられるのは、〈個〉の自由を貪欲に求める姿勢と、現状への強い危機感であった。

北明はこのテクストのなかで、資本主義の原理を極端なかたちで体現した殺人会社という設定を用いているが、その背景にはいま挙げたような、〈個〉の自由を保障することもできず、さらには危機的現状に対して何ら有効な手を下すことも出来ない既存の諸主義を乗り越える、新たな道を探ろうとする志向があったことは忘れてはならない。このテクストは、既存の諸主義が忌避するこの資本主義の可能性と限界を見極めようとする模擬実験装置でもあったのである。

そして、そこから導きだされたのは、資本主義を単純に敵視するのではなく、そのシステム（「差異の商品化」）の力を、権力構造に対する抵抗のために転用してゆくという〈戦術〉であった。ただ、物語のなかでは、主人公にとってはある種の平等社会としてみなされてきた殺人会社が、その実、現実社会に存在する不平等や差別といった様々な歪みを抱え込んだ暴力的機関であったこともしっかりと描かれており、資本主義とそれによる社会支配が肯定されているわけでは決してない。重要なのは、革命などによって世界を一挙に改善することで、危機的な現状を乗り越えようとするのではなく、所与の現実（資本主義による支配）のなかで、使えるものを使いながら、いかに自由な〈個〉として生き抜いてゆくかを思考している点であろう。そして、そうした資本主義を転用する〈戦術〉は、

その後の北明のエログロ誌出版の基本方針となってゆく。これらの分析結果からは、プロレタリア文学からエログロへの〈転向〉が、これまでしばしば論じられてきたような文学・社会的挫折と、そこからの逃避といったネガティヴな見方に収まり切らないことがみえてこよう。この研究により、北明らの〈転向〉が、同時代の現状に対する、独自の思想的模索のひとつとしても位置づけ可能となり、日本近代文化史・思想史を考える際に、看過できないものであることが明らかとなったといえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①竹内瑞穂、「流動」する「変態」―谷崎潤一郎「鮫人」の逸脱者イメージ―、愛知淑徳大学国語国文、査読無、34 号、2011、37-56、http://aska-r.aasa.ac.jp/dspace/bitstream/10638/1135/1/0005-034-201103-037-056.pdf

〔学会発表〕（計１件）
①竹内瑞穂、エログロへの〈転向〉―梅原北明『殺人会社』の社会批評法―、日本近代文学会、2011.11.19、お茶の水女子大学（東京都）

６．研究組織
(1)研究代表者
竹内　瑞穂（TAKEUCHI MIZUHO）
愛知淑徳大学・文学部・助教
研究者番号：00581224

(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし